

2015

国語

注 意

1. 試験時間は、8:50～9:40の**50分**です。
2. 問題は㊦から㊨まであります。
3. 解答用紙に、受験番号と氏名を書きなさい。
4. 解答はすべて**解答用紙**に書きなさい。
5. 先生の指示があるまで、問題用紙をあけてはいけません。
6. 問題についての質問はうけつけません。
7. 試験が終わったら、解答用紙を裏返しにしておきなさい。

— 1 —
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「ぼく」は、父親の仕事の関係で、日本の学校ではなくドイツの学校に通っている小学六年生であり、同じクラスの「マドンナB」という少女のことが気になっている。クラスの皆で豚を解体する農家にやってきたとき、豚の悲鳴が聞こえてきた。

おじさんは、ホッター先生と握手をかわしたあと、ぼくたちの方をむいた。

「さっきのあの声、聞こえちゃっただろうな。今、ご近所さんが何人か集まって、裏庭の納屋で、①その、なんだ」
おじさんは、チラッと女の子たちに視線を投げる。

「ま、ともかく、今、その、なんだ、解体中つてわけだ。フローライン（おじょうさん）たちには、ちと、うむ、なんだな、刺激が強すぎるかも、うむ、しれん」

おじさんの言葉をひきとって、ホッター先生がつづける。

「その、解体は、昔ながらの手法で行なわれるわけだから、女性にはすすめないが、ぜひ見学したいという男性諸君は、私といっしょに来なさい。一生のうち何度も見られるもんじやないからね」

ぼくたちは、思わず顔を見合わせた。

「おい、どうする？」

シュテファンが、一歩 後ずさるようからだをひいて小声でささやく。

②「くん。ぼくは、みんながいっせいにぐりぐりとばをのむ音を聞いたような気がした。」

③「い、いくよ、もちろん！」

男の子たちがぞろぞろ動きはじめた。女の子でついてきたのは三人。残った者は、口々に「おやめなさいよ」とわめいている。

三人の中にはマドンナBもいた。さっきと変わらない、しゃんとした姿勢で歩いてくる。

「すつげえ、マドンナBだぜ。へいきなのかな、きれいな顔してさ、わりに 神経太いな」

シュテファンが首をすくめる。

「きれいな顔で、見ちゃいけないのかよ」

ぼくは、④思わずシュテファンをにらみつけた。

豚は、納屋の入り口近くの柱につつてあった。

「ああ、神様！」

気の弱いトーマスの声だ。

なまあたたかい血のにおいが、からだにまとわりつく。納屋のうす闇に、白っぽい豚が、さかさづりになって、① 浮かんでいる。
脇の下を、すうつと一筋、冷たい汗が流れおちていくのがわかる。

「この解体のしかたは、背割りといって、見たとおり背中からすっぽりと割る方法だ。道具は、さあ、もう少し近づてらん、これだ。どうだい、いろんなナイフがあるだろう。これを使いわけるんだ」

みんな、おっかなびつくりの気分も手伝って、いつになくおとなしい。

納屋の入り口近くでは、赤いひげの男が腕まくりしてバケツに入った液体をかきまぜている。中には、どろっと赤黒い血液。

「あれが、ブルートヴルスト（血のソーセージ）の原料つてわけか」
だれかのささやきが聞こえる。

「そのとおり。おれたちドイツの農民は、豚の血の一滴、内臓のひとつかけらだつてむだにはしない。ぜんぶ、使っているいろんな方法で食べちゃう。なんせ、神様が与えてくださったいだいな豚だ。そまつになんかできやしない」

おじさんの声がいちだんと高まる。

「さあ、それじゃ、こいつをもつとばらばらにして、いよいよ、ソーセージをつくるぞ。さあ、ぼうずたち、手伝え！」

みんな顔を見合わせるばかりで、だれも前に出ようとはしない。

② 歩いていったのは、ホッター先生だ。何を思ったか先生は、いきなり豚の背中に手をつっこんだ。ギャツという低いうめき声が

聞こえる。ぼくも人のことどころじゃない。⑤足元がゆれるようだ。

「みんな、こつちへ来てごらん」

ホッター先生は、思いがけずおだやかな声で話しはじめた。

「あたたかいんだ、この豚。まだ、ぬくもりがある。肉があたたかい」

先生は目を閉じて、さらに手を中に押し入れる。

「さあ、だれでもいい、さわってこらん」

だれも動かない。十秒ぐらいすぎて、凍ったような空気が、

動いた。

マドンナB！

みんなの中から進み出たのは、マドンナBだった！ ぼくは、のどがカラカラになってつばものめない。

「あたたかいわ、本当にあたたかい」

マドンナBの表情は見えないが、その声は先生と同じようにおだやかだ。

みんなが次々と動き出す。ぼくもその波に乗る。肉を見ないようにして、思いきって手を入れる。

あたたかい。たしかに、あたたかい。

「さっきまで、この豚は生きていた、ぼくたちと同じように。そして、今、この豚はそのぬくもりを残して、ソーセージになろうとしている。ぼくたちの食糧になる。ぼくたち人間は、生きていくために、いろいろなものを食べている。野菜、肉、魚、それらすべては、みな生命あるものだ。ぼくたち人間は、他の生きものの生命をもらって生きている。それを忘れないでほしい」

いつもなら「フン」と鼻先で笑ってしまうお説教じみた先生の言い方も、不思議と気にならない。先生の言葉は、
こまれていく。それというのも、
何より、ぼくの手に残った豚のあたたかさが、言葉以上のものを伝えてくれたからにちがいない。

『あしたは晴れた空の下で——ぼくたちのチェルノブイリ』中澤晶子の文章による

問一 波線部 a、b の意味として最も適切なものをそれぞれ選んで、記号で答えなさい。

a 後ずさる

- ア おそろおそろ背後を振り返る
イ 体ごと大きく後退する
ウ 後方をしきりに確認する
エ 前を向いたまま後ろに下がる
オ 思わず相手に背中を向ける

b 神経(が)太い

- ア 鈍感で物事に対して動じない
イ 強い信念があり迷いがない
ウ 責任感が強く物怖じしない
エ 男勝りで怖いものを知らない
オ 意志が固く冷静さを失わない

問二 空欄 1 4 に入る言葉として最も適当なものをそれぞれ選んで、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度使つ

てはいけません。

- ア ぼたぼたと イ じつとりと ウ つかつかと エ するすると オ ぼおつと カ ふわりと

問三 傍線部①「その、なんだ」と「おじさん」が言いよんでいるのはなぜですか。四十字以内で答えなさい。

問四 傍線部②「ごくん。ぼくは、みんながいっせいにぐくりとつばをのむ音を聞いたような気がした」とありますが、この場の様子を表現する語句として最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 期待と沈黙 イ 焦りと緊迫 ウ 緊張と静寂 エ 怒りと切迫 オ 迷いと白熱

問五 傍線部③「い、いくよ、もちろん！」と言った「男の子」の気持ちを三十字以上四十字以内で答えなさい。

問六 傍線部④「思わずシユテファンをにらみつけた」「ぼく」の説明として最も適当なものを、次の中から選んで記号で答えなさい。

- ア 好意を寄せる相手をからかうような発言に、軽い反発を覚えている。
イ わざと「ぼく」を怒らせるようなことを言ったことに、腹を立てている。
ウ 自分と同じ相手を気にしていることに気付く、ライバル心を燃やしている。
エ 深刻な場の雰囲気（ふんいき）を台無しにするような冗談（じやうだん）に、不謹慎（ふきんしん）だと怒っている。
オ 「きれいな顔」という表現が女性差別につながると思う、不愉快（ふげいかい）に感じている。

問七 傍線部⑤「足元がゆれるようだ」という表現についての説明として最も適当なものを、次の中から選んで記号で答えなさい。

- ア 擬人法（ぎにんぽう）を使い、「ぼく」の驚きとあきれを表現している。
イ 風景描写（ふうけいめいぎょう）に重ね、「ぼく」の失望と悲しみを表現している。
ウ ユーモア（ユーモア）を交え、「ぼく」の混乱（こんらん）と戸惑（とまど）いを表現している。
エ 飾らない言葉で、「ぼく」の不快（ふくたい）と嫌悪（けんお）感を表現している。
オ 比喩（ひよ）を用いて、「ぼく」の強い衝撃（しやうげき）と動揺（どうよう）を表現している。

問八 傍線部⑥「何より、ぼくの手に残った豚のあたたかさが、言葉以上のものを伝えてくれたからにちがいない」とありますが、「言葉以上のもの」とは具体的にはどのようなものですか。最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 普段の生活ではありがたいとも思わない、生命のお説教をする先生の偉大さ。
イ 頭で考えるだけではなかなか実感（じつかん）しにくい、生命の確かな手触りと重み。
ウ 辞書に載っているような説明では分からない、生命に関する専門的な知識。
エ 単に言葉を並べるだけではたどり着けない、生命の根源的な謎と神秘性。
オ 一方的に話を聞いているだけでは伝わらない、生命のはかなさと切なさ。

問九 本文の特徴や登場人物についての説明として適当なものを、次の中から二つ選んで記号で答えなさい。

- ア 文末に「った」という過去形の表現の他に現在形の表現を織り交ぜることで、臨場感が増している。
イ 出来事を「ぼく」だけでなく様々な人物の視点から描くことで、ある種の奥行きが生まれている。
ウ 短い文を次々とつなげることで、展開される出来事があつという間に過ぎた様子が表現されている。
エ 「マドンナB」は、周りの生徒とは違う独特の雰囲気を持った大人びた人物として描かれている。
オ 「おじさん」は、遠慮がちで人前で話すのがあまり得意でない恥ずかしがり屋として描かれている。
カ 「ホッター先生」は、考えなしに情熱だけで突き進む無鉄砲（むてつぱう）な性格を持つ人物として描かれている。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

学校の生徒は、先生と教科書にひっぱられて勉強する。自学自習ということばこそあるけれども、独力で知識を得るのではない。いわばグライダーのようなものだ。自力では飛び上がることはできない。

グライダーと飛行機は遠くから見ると、似ている。空を飛ぶのも同じで、グライダーが音もなく優雅（ゆうが）に滑空（かつくう）しているさまは、飛行機よりもむしろ美しいくらいだ。ただ、悲しいかな、自力で飛ぶことができない。

① 学校はグライダー人間の訓練所である。飛行機人間はつくらない。グライダーの練習に、エンジンのついた飛行機などがまじっているのは迷惑する。危険だ。学校では、ひっぱら（a）れるままに、どこへでもついて行く従順（じゆん）さが尊重（そんじゆう）される。勝手に飛び上がったりの規律違反。たちまちチェックさ（b）れる。やがてそれぞれにグライダーらしくなつて卒業する。

優等生はグライダーとして優秀なのである。飛べそうではないか、ひとつ飛んでみる、などと言われても困る。指導するものがあつてのグライダーである。

グライダーとしては一流である学生が、卒業（まがわ）間際（まぎわ）になつて論文（ろんぶん）を書くことになる。これはこれまでの勉強といささか勝手が違う。何でも自由に自分の好きなことを書いてみよ、というのが論文である。グライダーは途方（とほう）にくれる。突如（とつじゆ）としてこれまでとまるで違ったことを要求されても、できるわけがない。② グライダーとして優秀な学生ほどあわてる。

そういう学生が教師のところへ③「相談」にくる。ろくに自分の考えもなしにやってきたってしかたがないではないか。教師に X
とり Y としてもらって書いても論文にならない。そんなことを言つて突っぱねる教師がいようものなら、グライダー学生は、あの
先生はろくに指導もしてくれない、と Z をとがらしてその非を鳴らすのである。

そして面倒見のいい先生のところへかけ込み、あれを認め、これを見よと入れ知恵してもらい、めでたくグライダー論文を作成する。卒業論文はそういうのが大部分と言つても過言ではあるまい。

いわゆる成績のいい学生ほど、この論文にてこずるようだ。言われた通りのことをするのは得意だが、自分で考えてテーマをもてと言
われるのは苦手である。長年のグライダー訓練ではいづれもかならず曳いてくれるものがある。それになれると、自力飛行の力を失つてし
まうのかもしれない。

もちろん例外はあるけれども、一般に、学校教育を受けた期間が長ければ長いほど、自力飛行の能力は低下する。グライダーでうまく飛
べるのに、④危ない飛行機になりたくないのは当たり前である。

こどもというのは実に創造的である。たいていのこどもは劣せずして詩人であり、小発明家である。ところが、学校で知識を与えられ
るにつれて、散文的になり、人まねがうまくなる。昔の芸術家が学校教育を警戒したのは、たんなる感情論ではなかったと思われ。飛
行機を作ろうとしているのに、グライダー学校にいつまでもグズグズしてはいけけないのははつきりしている。

いまでも、プロの棋士たちの間に、中学校までが義務教育になっているのがじやまだとはつきり言う人がいる。いちばん頭の発達の速い
時期に、学校でグライダー訓練なんかさせられてはものにならない、というのであるらしい。

⑤人間には、グライダー能力と飛行機能力とがある。受動的に知識を得るのが前者、自分でものことを発明、発見するのが後者である。
両者はひとりの人間の中に同居している。グライダー能力をまったく欠いていては、基本的知識すら習得できない。何も知らないで、独力
で飛ぼうとすれば、どんな事故になるかわからない。

しかし、現実には、グライダー能力が圧倒的で、飛行機能力はまるでなし、という「優秀な」人間がたくさんいることもたしかで、しかも、
⑥そういう人も「翔べる」という評価を受けているのである。

学校はグライダー人間をつくるには適しているが、飛行機人間を育てる努力はほんのすこししかしていない。学校教育が整備されてきた
ということは、ますますグライダー人間をふやす結果になった。お互いに似たようなグライダー人間になると、グライダーの欠点を忘れて
しまう。知的、知的と言つていけば、翔んでいるように錯覚する。

(中略)

指導者がいて、目標がはっきりしているところではグライダー能力が高く評価さる。けれども、新しい文化の創造には飛行機能力が不
可欠である。それを学校教育はむしろ抑圧してきた。急にそれをのばそうとすれば、さまざまな困難が伴う。

他方、現代は情報の社会である。グライダー人間をすっかりやめてしまふわけにも行かない。それなら、グライダーにエンジンを搭載す
るにはどうしたらいいのか。学校も社会もそれを考える必要がある。

(『思考の整理学』外山滋比古の文章による)

問一 傍線部①「学校はグライダー人間の訓練所である」とありますが、どういふことですか。最も適当なものを次の中から選んで、記号
で答えなさい。

ア 学生はひたすら先生の言うことだけを聞いて、他の意見には耳を貸さないようになるということ。

イ 学生は教科書に書いてあることをそのまま信じて、自分の考えを持たないようになるということ。

ウ 学生は自分で物事を考えるよりも、指導してくれるものにおとなしく従うようになるということ。

エ 自分勝手だった学生が、学校という場所でも最も大切な規律が守れるようにしつけられていくということ。

オ 先生や教科書によって指導されていった結果、最後は自学自習の大切さに気づいていくということ。

問二 傍線部②「グライダーとして優秀な学生ほどあわてる」とありますが、なぜですか。四十字以内で説明しなさい。

問三 空欄 X・Y・Z には、身体の一部を表す語が入ります。漢字でそれぞれ答えなさい。

問四 傍線部③「相談」とありますが、ここにはどのような意味が込められていますか。その説明として最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 自分の中に書きたいことはあっても書き方が分からないので、先生の意見を真剣に求めている。
- イ 自分の中に確かな考えがないので見せかけの相談をして、本当は先生に頼ろうとしている。
- ウ 一生懸命相談するそぶりを見せて、難しい卒業論文からなんとかして逃れようとしている。
- エ 学生の悩みに真面目につきあってくれたい先生かどうか、相談するふりをして試している。
- オ 大人しく指導に従ってきたものの、卒業論文は自力で書こうと思い先生に助言を求めている。

問五 傍線部④「危ない飛行機になりたくない」とありますが、飛行機になるのはなぜ危ないのですか。分かりやすく説明しなさい。

問六 傍線部⑤「人間には、グライダー能力と飛行機能力とがある」とありますが、次のア～オについて、グライダー能力が必要ならばA、飛行機能力が必要ならばBを答えなさい。

- ア 学校教育 イ 卒業論文 ウ 発明・創作 エ 情報社会 オ 文化の創造

問七 傍線部⑥「そういう人も『翔べる』という評価を受けている」とありますが、なぜそうなるのですか。五十字以内で説明しなさい。

問八 本文の説明として最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 学校教育の理想と現実を見比べながら、理想に傾きすぎた過去を教訓にしていることと呼びかけている。
- イ 学校教育の足りない点に批判を加えながら、今後の社会に必要な学校の姿を具体的に示している。
- ウ 学校教育と芸術家の考え方を比較しながら、今後の社会に必要な飛行機人間の作り方を提案している。
- エ 学校教育の過去の実績を認めつつも、今までのグライダー教育の間違いにも適切な批判を行っている。
- オ 学校教育の長所と短所を踏まえつつ、今後の社会に必要な教育のあり方を探ろうとしている。

問九 波線a～cの中で、その働きが他と異なるものを一つ選んで、記号で答えなさい。

三 次の①～⑤の傍線部のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① あの二人はタイショウ的な性格をしている。
- ② 友人同士のケンカのチュウサイをする。
- ③ 魚の知識において私の右に出る者はいないというジフを持っている。
- ④ かつてフモウの大地といわれた場所に緑が生い茂る。
- ⑤ 一流の料理人は自ら包丁をトグ。

注意 字数制限の問題では、句読点も一字として数えます。

[illegible]

得 点	
-----	--

受 験 番 号		フ リ ガ ナ	
		氏 名	

三

二

①	問九	問八	問七				問六	問五		問四	問三	問二		問一			
							ア				X						
②							イ						Y				
③							ウ						Z				
④							エ										
⑤							オ										

ぐ

フ

リ

ガ

ナ